

コロナ禍に思う「つながり」の大切さ

国立病院機構東京医療センター
看護部長
近藤 才子

COVID-19感染症による感染拡大が続き、ダイヤモンドプリンセス号の乗客の感染からすでに一年半以上経過しています。この未曾有の世界的パンデミックの中で、日本では1年遅れの東京オリンピック・パラリンピックが開催されました。開催期間中はまさに第5波の真只中であり、東京ではオリンピック開催からパラリンピック修了の期間には、1日の感染者数が5000人を超える日もあるという状況下でした。オリンピックの開催も賛否両論あり、医療の現場では病床の逼迫も続いていることに加え、東京でのオリンピックによる感染拡大が追い打ちをかけるのではないかと懸念されていました。

長期に渡りこの感染の状況下で日常生活を送るストレスは計り知れないものがあります。入院を余儀なくされた患者さんも家族との面会ができない状況が続いています。実際に一番そばにいてほしい時に会いたい人に会えないのは、本当に辛いことだと思います。看護師はそばにいて、患者さんに寄り添う看護の提供を心掛けていますが、ご家族に勝るものではありません。

医療従事者は一般の方より感染防止には敏感です。普段の生活も3密をさげ、ソーシャルディスタンスをとり、親しい人たちとの会食も我慢しています。当院は地方からの就職者が多いのですが、「もう2年実家に帰っていません。両親に会いたいです。でも感染をさせてしまうのではないかと怖いので帰れません。」という言葉をよく耳にしました。その

たびに胸が苦しく、申し訳なく思うのと同時に、医療従事者として、しっかりこの感染症に立ち向かい患者さんのために看護をしているのだなと感じることができ、誇らしくも思いました。

患者さんも医療従事者も大切なご家族がいます。心の支えとなる存在です。感染拡大というこのような状況がなければ人と人との「つながり」の大切さをこんなにも感じることはなかったのかもしれませんが、会いたい時に会いに行くことができることが、あたりまえではないということを実感しているのは皆同じではないでしょうか。

さて、東京オリンピック・パラリンピックは無事終了し、多くの選手が活躍しましたが、その中でもオリンピック新種目のスケートボードでは10代の選手が金・銀・銅メダルを独占し、大活躍しました。また、13歳という日本史上最年少の金メダリストも誕生しました。若い世代の活躍はコロナの閉塞感の中で、大変明るい話題であり一所懸命に競技に望む姿には勇気をもらいました。そして、何よりも大きなクラスターの発生もなく終了できたのは選手も、大会を支えた方々も、一丸となれたこと、また日本国民ひとり一人の努力の賜物ではないかと思えます。開催について賛否両論はありましたが、これもまた人と人との「つながり」で成し遂げられた大きなことであると感じています。

当院もようやくWi-Fi環境を整える予定となりました。iPadなど使用し、画面越しでもご家族との面会ができれば心細かった入院生活も少しは癒されるのではないかと思います。COVID-19感染症が収束しても、また新興感染症がいつ発生するか予測はできません。私たち医療従事者は平時から有事に対応できるように備えておかなければなりません。ワクチン接種が進み、治療薬が開発され少しずつ収束の兆しはありますが、何れくる第6波に今から備えなければなりません。目には見えませんが、ひとり一人が大切な人とつながっている心の糸が切れないように、人と人との「つながり」を大切に、この難局に一丸となり立ち向かいたいと思っています。